

学部留学生対象の日本語教育を考える —中国人男子学生のライフストーリーを通して—

中山亜紀子

要旨

大学4年間とは、学業を修めるだけではなく、社会に出るための準備期間として位置づけられる。この期間、学部留学生がどのような学生生活を送り、将来の目標を決定しているのかを知ることは、彼らのニーズを知り、日本語教育の実践を深化させる一助となるだろう。本稿では、学部留学生（Qさん、仮名）にインタビューを行い、ライフストーリーを作成した。そこから、彼にとっての日本語学習の意味と、職業選択を含めた卒業後の目標をいかに決定したのかを考察した。Qさんにとって日本語学習とは、彼の将来の目標達成に直結していたが、その学習だけでは、目標の具体化はできなかった。そのためには、アルバイト先における他の店員との時間をかけた交流の中で、日本だけではなく、Qさんが日本ではどのように生きていけるのかを含めた観察が必要であったことを示唆した。

キーワード

ライフストーリー、学部留学生、将来像、アルバイト、アカデミック・ジャパニーズ

1. はじめに

学部留学生に対する日本語教育は、2000年の留学試験導入とそれに前後して研究・実践報告が盛んになったアカデミック・ジャパニーズ（以下、AJ）によって、新たな局面を迎えたといつてよいだろう。AJの定義に共通理解はない（門倉, 2006）が、大学生活に必要な言語形式などの習得のみでなく、協働的教育手法も用いて批判的思考力や発信力、自己表現力を育てよう（門倉, 2003 所収の諸論文）という目標をもつ実践と括ることができる。これは、「自分のこれからの学習をデザインし、学士課程を終えた後のキャリアデザインを含め、自らの人生をデザインできる（西垣, 2007; 97）」学生を育てようという初年次教育の目標とも重なるものである。

この初年次教育の目標にも見られるように、大学とは、学業を修める場だけではなく、学生が将来を決定するための一段階であることを考えれば、留学生がどのような過程を経て、卒業後の目標を決定しているのか、その決定に何が重要な役割を果たしているのか、日本語学習や大学教育とはどのような関わりがあるのかを知ることは、学部留学生のニーズを探り、AJの実践を深化させる一助となるだろう。

筆者は、夢野大学（仮名）文科系学部2年生のある中国人男子留学生（Qさん、仮名）に大学生活についてのインタビューを行い、それをういてライフストーリーを作成した。本稿では、そのライフストーリーの中からQさんがどのような将来の目標を持ち、そこに日本語学習はどのように関わっていたのか、また卒業後の目標の具体化に大きな役割を果たしたアルバイト先RとQさんの関わり方を考察する。これが本稿の第一の目的である。

ライフストーリー^(注1)は、体験的真実を表している (Mann, 1992) と言われ、語られたものを指す場合と、それを編集してできたストーリー (物語) を指す場合がある。本稿では、後者の意味で用いる。

物語とは「時間を超越した真実を眺める全知の眼によるのではなく (ブルーナー, 1998; 41)」主人公の目から見た現実の描写である。物語を読むとは、読者が物語の「題材」を、読者のレパトリーと調和させることによって、そのテキストの影響の下に読者自身のテキストを構築するという行為であり、読者自身がその物語の (第二の) 作者となる (ブルーナー, 前掲書)。したがって、物語の世界を理解することは、読者が新たな世界を作り上げることでもある (リクール, 1987)。Qさんのストーリーを読むことで、学部留学生の世界を理解し、学習者理解の幅を広げることが、本稿の第二の目的である。

2. 調査

2.1 フィールド

夢野大学は地方国立大学で、留学生に提供される日本語科目は1年次のみ、各期2コマずつである。必修扱いではなく、第二外国語の単位に読みかえられている。前期は読解と発表を中心に、後期はレポート作成を中心にシラバスが組まれている。筆者とQさんとは、前期の授業を通じて知り合った。

2.2 インタビュー

調査は、学部留学生に対する日本語授業改善調査の一環として行われた。インタビューの依頼は、口頭で筆者が行った。インタビューは、学内の邪魔の入りにくい静かな場所で、日本語を使って計4回行い、各回録音した。録音は1回あたり、1時間から1時間半ほどである。録音されたものの他に、インタビュー後にフィールドノートをつくり、録音前後で語られたことや、その日の印象などを記した。

1回目のインタビューでは、Qさんの将来の目標とその目標を達成するための努力などが語られた。2回目以降は、1回目のインタビューで筆者がわからなかった部分、特に目標決定の過程について語ってもらった。

インタビューの録音は、文字化し、Qさんに内容を確認してもらった。しかし、3回目のインタビューの一部については、Qさんから研究に使わないよう申し出があり、今回の調査結果からは削除してある。

各インタビューの録音やフィールドノートの記述を何回か読み返し、そこから語られたことを、出来事ごとに区切り、その切った一まとまりを短い文にまとめ、項目とした。それらを時系列に並べなおして、Qさんのライフストーリーを作った。出来上がったストーリーおよび本稿はQさんに確認してもらい、修正を受けた。

3. Qさんのストーリー^(注2)

Qさんは、夢野大学の2年生だ。中国の高校を卒業してから4年前に来日し、地方都市Hの日本語学校を経て、現在、夢野大学で学んでいる。

日本に来る前、Qさんはあまり勉強熱心ではなかった。授業中はそれなりに勉強するの

だが、復習や予習はせず、友だちとネットカフェに行ってゲームをしたり、スポーツをしたりしていた。今から思うと、このころは勉強の重要性がわかっていなかった。

もちろん中国におったときには、17歳なんですよ。そういう時は「勉強ってこんなに重要だ」とかですね、全く認識はできなかったんですよ。

この高校時代に、同じ高校に通う現在のガールフレンドに出会った。一般的に中国では、高校生の男女交際は勉強の邪魔になると考えられている。しかし、二人は家族や先生にばれないようにデートを重ねた。彼女はとても頭のいい人だ。それに小さいときから本をたくさん読んでいたこともあって、話し方が知的だ。彼女と付き合いだしてからすぐ、彼女に「自分の嫁になってですね、いろいろ人生の企画とか」してほしいと思うようになった。

大学入学試験の結果、頭のいい彼女は名門大学に合格した。でも高校時代の「全精力を彼女に」費やしたQさんは進路が決まらなかった。「他の人に差をつけたい」という気持ちもあったし、両親にも勧められて、日本での大学入学を目指すことにした。そして、H市の日本語学校に入学したQさんは、一から日本語を学び始めた。

この当時、Qさんは接客が得意ではないから、工場のアルバイトをしていた。工場での仕事は「黙々、こつこつ自分だけでやってる」きつい大変な仕事だった。汗まみれの制服のにおいに気づくたびに、Qさんは将来は体力に頼って稼ぐのではなく、頭と両手で自分の未来を開かなければいけないと思った。

まあもっと勉強ができれば、いい大学に入って、学費もですね安くなって、バイト以外に時間を費やして、他のことをやったらいいかなと思ってですね。

Qさんは新しい勉強方法を始めた。一つは、日本語勉強ノートを作って、前のページからは授業や日常生活で見聞きした新しい言葉を、後ろからは新しく習った文法などを書き留めるという方法だ。新しい言葉は漢字なら読み方、外来語ならその言葉の由来、同義語、時には図まで含めて書いた。重要な言葉や文法は、赤ペンで何度もなぞって覚えた。

もう一つの方法は、ニュース解説や新聞などをよく読んで「情報収集」することだ。関心のあること、自分自身が知らない専門用語、大事な出来事などを日付ごとに分けてノートにまとめる。日本で働いている中国人の知人の真似をして、子ども向けの新聞やテレビのニュースを「情報収集」の道具として見るようになった。

日本語学校のほかは、家と図書館とバイト先の3点だけを行き来していた当時のことを思い出すと、自分でも「真面目」な生活をしていたと思う。その甲斐あって、Qさんは日本語学校で奨学金や賞状をもらったし、夢野大学に入学できた。一方で当時はよく、「体は日本にいるのに、実際の日本人の生活習慣などをぜんぜん知らないで、まるで母国にいるような感じがする」と思っていた。

希望通り夢野大学に入学したQさんは、日本語学校時代からの勉強方法を続ける一方、「すべての授業に出席しよう」とはりきっていた。また、夢野大学付近には工場も少なく、「なかなか日本語も上達できない」からと、レストランチェーン店（以下、R）とコンビニで働き出した。コンビニには何人かアルバイトがいるが、お互い無交渉であまり話はし

ない。Rには、店長と何人かのパートの店員たちがいる。

この店はQさんが「日本人の中に現実的に溶け込む第一歩になった」。店では仕事が暇な時は、「みんなで一服して」麦茶を飲む。Qさんは麦茶ではなく体にいいからと、小さい頃から飲み続けてきた白湯を飲む。また、いっしょにしばしば酒を飲みに行く。話題はお互いの生活や世の中のニュースなどだ。日中関係が悪くなった時には、中国人としての立場から話をした。

仮にですね、あれは日本が正しいとしても、自分の立場からですね、やっぱ自分の国が正しいとか主張したくなるんじゃないですか。あの一自分も国籍は中国なんだし。仮に先生(筆者)とか日本人が中国に留学して現地の人から同じ質問されたら、やっぱりこういうふうに言うんじゃないですか。仮に中国が正しいとしても自分は日本人だし、その立場は変わることはないでしょ。自分もそう言ったんですよ。

こんな風に「いろいろずばり聞く」ことができるのは、「なじみがあって」お互いのことをよく知っているからだろう。そこの日本人と話すようになって、知らなかったことわざや慣用語が出てくると日本語勉強ノートに書き込んで覚えるようになった。また、知識としては知っていたが詳しくは知らなかった「どこかに行ったときにはお土産を買ってくるとか」の日本の習慣を実際に体験することになった。さらに、ある女性店員は、配膳の仕方や、仕事をきっちりしなかったら「店長も頭を下げて謝罪するんですよ。そこまでなんです」と、日本における働き方の基礎を教えてくれた。今、Qさんは「仕事が雑だけど真面目」とよく言われる。

Qさんはそこで働きはじめて、日本人は中国人に比べて、社会に関心をもって生活していることに気付いた。

まあ色々、どういうふうに言ったらいいかな、平均の知識なんですよ。社会の色々なことに関心とかですね、あっ今日はなんかニュースがあったんですよとか、そういう関心度なんですよ。結構日本人平均してみればですね、結構中国人よりはるかに上なんですよ。

夢野大学に入学したときは、Qさんは、中国に帰るか日本で就職するか、卒業してから考えようと思っていた。中国に帰っても、たぶん仕事は見つかる。しかし、それには親や親せきのコネを使わなければならない。「もう20才超えて大人」のQさんは、そんなことはしたくなかった。日本は中国に比べて「福祉とか、給与とかですね、社会保険とか」が充実している。学べるところがいっぱいあるし、将来日本で就職しようと決意した。

たまたま、Rの店長は、その本社で20年近く仕事をしていた人だった。店長は、Rチェーンが、最近中国に進出し始め、今後も中国で事業を大きく展開しようとしているという話をした。

2年生になる前、彼女が中国の大学を卒業したら、日本に来ることになった。それは、二人は将来結婚するということを意味している。Qさんは「彼女も含め、よりいい生活を送るためにですね、自分の力でなんとかしなくちゃ」と感じるようになった。

今のところは、Rの本社に就職することを第一目標に据えてがんばっている。

日本で就職するのは大変だ。アルバイト先の人や、夢野大学の4年生が就職で苦労している姿を見ると、Qさんの危機感は増すばかりだ。

今は、情報収集にももっと熱を入れるようになった。このように情報収集すると、いいことがいくつかある。一つは大学のゼミの議論のネタになることだ。夢野大学では2年生後期からゼミをとらなければならない。そこでは、少人数で先生といっしょに議論をする。

例えば、なんかこう色々事件があって、それに対して国はどんな政策を出しましたとかですね、これも色々みんなで議論をしていくんですけど、そういう基本的なものを知らないですよね、議論にならないんじゃないですか。

このゼミに参加することによって、自分の考えを明瞭かつ論理的に伝えることができるようになると思うし、中国の大学に行っていたら、このゼミ形式の授業は体験できなかったかもしれない。

またRや大学で話すときも、自分が社会のことを知っていると話が盛り上がる。例えば、授業で知り合った日本人の友だちともたまに食事をするが、彼との話題は日本や中国の状況など政治や経済の話などが多い。男同士は政治の話をする人が多い。

もちろん他の人にもまあ「こういう情報があったんですよ」って、それも披露できるんですけど、他の人から「こういう事件があった」って、いろいろ話題が盛り上がるんですよ。ちょっとあの事件知らなかったら、そういつてそれで終わりじゃないですか。

さらに、金融危機、株の空売りといった事柄についてしっかりした話ができたら、他の人から「知識人みたいな人」と思ってもらえる。加えて就職の役にもたつし、世界情勢が把握できて、様々なことつながりが分析できる。

この情報収集に加えて、面接で有利になるように、新聞社主催の論文コンテストやエッセイコンテストにも応募するようになった。色々な検定試験も受けている。また、簿記の勉強もしなければと思っている。これらの勉強は非常に時間がかかる。「もう行かなくてもいいかな」と思う授業には行かず、自分の勉強をしている。

自分が大学で学んでいる専門の基礎知識や一年次の日本語のクラスで習ったレポートの書き方などは非常に役に立っていると思う。今も日本語で難しいのは敬語や外来語だ。でも、日本人を相手に話すことで、もっと基礎の日本語力も身につくだろう。日本人と留学生の交流会などがあつたらなるべく行ってみたい。

4. 考察

4.1 Qさんの目標と日本語

Qさんの目標とは、何だろうか。工場での体験から「いい大学に入ろう」と決心し、彼女の来日を契機に、「いい生活」を目指して、勉強に一層力を入れているところから、「頭と両手」を使って、経済力を持つことが彼の目標だといえる。それだけではなく、就職の

ために親に頼ることをよしとせず、加えて「情報収集」をすると知識人のように見られることや、男なら政治の話をよくすると述べている。また、専門のゼミでは「論理的」な話し方が学べることを中国の大学にはない長所として指摘していた。これらのことから、Qさんの究極の目標とは、ホワイトカラーの仕事をしながらか経済力をもつことに加えて、知的で自立した男になることだと考えることができる。

Qさんにとって日本語とは二つの意味を持っているといえる。一つは、日本語学校時代は「いい大学」に入るための、現在は就職を有利にするための手段だ。JLPTをはじめ、各種検定試験で高いスコアを取って履歴書に書ける項目を一つでも多くし、就職の面接で有利になるようにすることは、Qさんの目標達成のために欠かせない努力である。また、レポート作成などのアカデミック・スキルを学ぶことも、就職への通り道である夢野大学をいい成績で卒業するためには必要なことだった。

もう一つ、Qさんにとって日本語とは、知的な男になるための情報や話し方を学べる言語だ。ニュースを見ながら世界の情報を収集するだけでなく、ゼミなどでそれについて討議し、論理的な話し方を学び、さらに、政治の話などを友だちとする日本語に習熟することは、知的な男というQさんの究極の目標に向かうための手段でもある。

これらの目標がなければ、Qさんがこれほどまでに日本語の勉強に投資することはなかっただろう。日本語学習は、Qさんの将来の目標と分かちがたく結びついているが、日本語学習だけでは、卒業後日本に残るのか、どの企業を目指すのかといった卒業後の目標を具体化することはできなかった。Qさんが自分の目指す将来像を持っていても、大学入学後に偶然出会ったRという場がなければ、その具体化は難しかったと言えるだろう。

4.2 アルバイトRという場

なぜRでは目標の具体化が可能だったのだろうか。直接の理由は、RでR本社が中国に進出していることを知ったことだろう。しかし、日本での就職を決意するには、日本人を「中国人より社会に対する関心が高く」、「学ぶことが多い」と観察できたことが大きな要因として挙げられる。なぜRでは、このような観察が可能だったのか。

RにおけるQさんの働きぶりや他の店員との交流を振り返ると、まず、Qさんは「学んでいた」といえる。配膳や働き方のルール、それらのルールに違反すればどうなるのかなどの仕事上の「常識」を学び、また本で読み知っていた日本の習慣や日本語の使い方を体験した。その一方で、Qさんは、自分が親しんできた中国の世界を殺してはいない。例えば、みんなが麦茶を飲んでも、Qさんは白湯を飲む。また「仕事は雑だけどまじめなQさん」として、店のルールに違反しない程度の雑さは残しながら仕事をしている。他の店員との政治についての会話では、中国人としての立場から自分の考えを述べている。QさんはRのルールを学ぶことで、彼の出自を消し去るのではなく、それをいくらか残したままRの活動に参加しているのだ。Qさんは、「日本」と「中国」を調停した形で自分を表現しているといえる^(注3)。

このような表現ができる他の店員との関係をQさんは「なじみ」と呼び、そこに至るには、時間をかけた関係性構築が必要だったことを示唆している。対面の場では、「話し手の一つ一つの言葉や行為が、他者からの評価として鏡のように返ってくる（溝上, 2004; 41)」。つまりRでのQさんの言葉や行為は、他の店員からの評価としてQさんに返って

くるのだ。Qさんは、それを受け入れ／反発して、Qさん自身を更新する。それと同時にそのような反応をした他の店員たちに対する見方を深める。逆もまた然りだろう。

Qさんのいう「なじみ」とは、時間をかけた対面の中で、お互いの反応によって、お互いを知る、言い換えれば、相手はどのような人なのか、相手にとって自分はどのような存在なのかを知り、それに合わせて自分を微調節していくという試行錯誤を含んだ関係のことを指していると考えられる。QさんがRで「日本」と「中国」を調停した形で自分を表現できたのは、日本の中で自分は何者なのか、日本人にならないで自分を表現することはどう可能なのかという試行錯誤を繰り返したからだと言えるのではないか。

このように考えると、QさんのRにおける観察とは、他の店員だけではなく、彼らの世界（日本）の中でのQさん自身を含んだ観察^(注4)だと言える。知的であることに価値を置くQさんが、日本にいれば学ぶことがあり、Qさん自身が知的で居続けることができるという観察は、時間をかけた他者とのやり取りの中で、日本におけるQさん自身を見つめることから生まれたものだと考えられる^(注5)。Rで将来の具体化ができた理由はここにあるのではないか。

5. おわりに

以上、Qさんのストーリーから、Qさんの目標と彼にとっての日本語学習の意味、また卒業後の目標の具体化に大きな役割を果たしたアルバイト先Rについて論じてきた。Qさんにとって、テスト対策も含めた日本語学習とは、彼の将来の成功のために欠かせない行為であり、就職および究極の目標達成の手段であった。Qさんのストーリーを一般化することはできないが、職業選択を含めた将来像と日本語学習との強い結びつきは、これから人生を切り開いていかなければいけないAJ対象者にあてはまる特徴かもしれない。

また、Qさんの将来像の具体化には、時間をかけたRでの交流の中で、日本社会を、日本におけるQさん自身の姿を含めて、観察し、吟味することが必要であった。ストーリーに現れるQさんが親しく付き合う夢野大学関係者は一人だけであり、Rと同じような観察は望みようもない。教育現場である夢野大学がなぜ、Rのような観察の場を提供できなかったのかは、日本人学生と留学生の関係を含め一考する必要があるだろう。

現在、学部留学生に対する日本語教育は、大学や学部によって学生の日本語レベルだけでなく、大学教育内での位置付けも多様であり、一括りにすることは難しい。それぞれの現場によって、Qさんのストーリーの意味は異なるだろう。筆者がQさんのストーリーを実践にどう生かすのかは別稿を用意したい。

(中山亜紀子 なかやまあきこ 佐賀大学留学生センター anakayam@cc.saga-u.ac.jp)

付記：インタビューとその後の度重なる依頼に、快く応じてくれたQさんに心からお礼を申し上げます。

注

1. ライフストーリーの詳細については、桜井（2002）、中山（2009）を参照のこと。
2. インタビュー中の言葉をそのまま引用した場合は、「 」あるいは、インデントをつ

- けた段落で表す。ストーリー中の説明的な文もQさんが語ったものである。
3. 第二言語話者が、他者に一方的に同化されるのでも、一方的に自己を押し付けるのではなく、両者を調停した形でコミュニケーションをすることの重要性は、すでに多くの言及がある (Canagarajah, 2004、矢部, 2007 など)。
 4. ストーリーには明確に表れていないが、Rでも多くの言葉を学ぼうとしていることから、この「観察」の中には、Qさん自身の日本語力も含まれると考えられる。
 5. 齊藤 (2006) は、第二言語で学ぶ児童生徒らが、自分の置かれた状況を把握し、「自分はどうなりたいのか、どうなれるのか」という主体的なアイデンティティに基づいて自己や他者に働きかけることの重要性を述べている。筆者は、ある場においてのアイデンティティをめぐる試行錯誤の過程こそが、大きな役割を果たすのではないかと考える。アイデンティティとは、何がしかの出来事に先立って構築されているものではなく、「いま・ここ」でのインターアクションを通して (再) 構築され続けるものだと考える。

参考文献

- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 門倉正美 (2003) 『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』(平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金基盤研究 A1, 課題番号 14208022, 研究成果中間報告書, 研究代表者門倉正美)
- 門倉正美 (2006) 「<学びとコミュニケーション>の日本語力—アカデミック・ジャパニーズからの発信」『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』門倉正美、筒井洋一、三宅和子編 ひつじ書房 pp.3-20
- 齊藤恵 (2006) 「JSL 児童生徒の成長における「audibility」と「行為主体性」の意味—子どもの成長を支援する言語教育のために」『リテラシーズ』(2) くろしお出版 pp.113-128
- 中山亜紀子 (2009) 『「日本語を話す私」と自分らしさ— 韓国人留学生のライフストーリー』(大阪大学大学院博士論文) 未刊公
- 西垣順子 (2007) 「学士過程への移行を目的とする初年次学生のための教育に関する考察」大阪市立大学『大学教育』(5-1) pp.95-103
- ブルーナー、ジェローム (1998) 『可能世界の心理』田中一郎訳 みすず書房
- 溝上慎一編 (2004) 『学生の学びを支援する大学教育』東信堂
- 矢部まゆみ (2007) 「日本語学習者はどのように「第三の場所」を実現するか—「声」を発し響きあわせる「対話」の中で」小川貴士編『日本語教育のフロンティア—学習者主体と協働』くろしお出版 pp.55-78
- リクール、ポール (1987) 『時間と物語 I —物語と時間性の循環／歴史と物語』久米博訳 新曜社
- Canagarajah, S. (2004) Multilingual writers and the struggle for voice in academic discourse. In A. Pavlenko, and A. Blackledge (eds) *Negotiation of Identities in Multilingual Contexts* (pp.266-289). Clevedon: Multilingual Matters.
- Mann, S. J. (1992) Telling a life story: Issues for research. *Management Education and Development*, 23(3), 271-280